開催場所　めむろーど３階　レファレンス室

開催日時　令和２年２月４日（火）10:00～11:00

参加者　　堀　文宏部会長、阿部　織尊副部会長

金津谷　博一、古館　明洋、高田　英寿

事務局　次田土地改良係長、阿部主事、藤村技師

オブザーバー　佐々木農林課長、

**事務局より検討項目１の「土づくり支援の充実」説明を終えて**

堀　部会長：

検討項目１について説明が終わりました。御意見、御質問等はありませんか。

堀　部会長：

課題(2)の取組①に関して、補助事業というのは、ＪＡで行っているてん菜の大型ハーベスターを用いた作業受委託に掛かる助成の事か。

阿部主事：

それとは異なったもので、畑作構造転換事業において、導入する作業機械（てん菜の真空播種機等）の１／２を助成するものである。その他に、町では甜菜作付奨励事業を実施しているので、取組①はそのような事業を示している。

堀　部会長：

マッチングシステムに関しては、話が進んでいるのか。堆肥を供給して良いと言っている農家が多数いるのか。

阿部主事：

マッチングは、現状では案の段階である。他の部会において、水分量が多く堆肥センターに入れることができない堆肥があり、農家同士でやり取りをしているとの話が出た。一方で、堆肥を求めている農家が多数いることを町でも把握していることから、農家同士が直接やり取りすることが困難な場合に、役場やＪＡが間に入って実施することを見込んでいる。

堀　部会長：

遠くから運ぶことが難しいので、理想を言えば地域に１つあれば望ましいと思う。

阿部　副部会長：

水分量が多い堆肥を散布したいという事なのか。

阿部主事：

散布したいというよりも、堆肥センターに入れれないし、自分の敷地に堆積する場所もないから、出したいという要望であった。

阿部　副部会長、堀　部会長：

バイオガスプラントに関して計画は進んでいないと思うが、許可が下りればそっちに持って行くことになるのか。バイオガスは辞めたのか。

次田土地改良係長：

まだ辞めてはいないが、時期を明確にしていない。

堀　部会長：

バイオガスは送電線の空き容量が無いという話か。

次田土地改良係長：

あくまでも目的は糞尿処理であり、付属として売電収入があるという位置づけである。今は、送電線の空き容量不足が課題になっているが、計画がなくなっている訳ではない。

阿部　副部会長：

バイオガスプラントが、仮に売電収入を無しで考えるとしたら、糞尿処理の残渣が出てくるものでは無いのか。出てくるものを既存の堆肥センターに持って行くという考え方も出来るのではないか。

佐々木農林課長：

そのようなイメージも持っている。但し、十何億投資すれば施設は建設できるし、毎年赤字でも問題ないのであれば運用できるが、そうする訳にもいかない。また、当初は売電収入で年間６千万円を見込んでいたが、それがなくなったため芽室町内で回す方策（水素やガスを供給する等）を町とＪＡで考えているところである。

なお、家畜糞尿処理については酪農家が何軒も集まって施設を建設する集中型と、各地域の酪農家で処理施設を作る個別型の２パターンがあると考えられるため、それぞれに支援できないか町とＪＡで協議している。

阿部　副部会長：

バイオガスプラントの堆肥を、自分で散布することが出来る人は、持ってきてもらえれば散布できる。散布する時期が集中することから、散布可能な人達の分だけでも確保されていれば問題ないと考えるので、そのような側面からもバイオガスプラントが必要だという考えも１つだと思う。堆肥を増産して、堆肥センターの稼働が増え、老朽化を進行させてしまうよりも、バイオガスプラントの堆肥と堆肥センターの堆肥を混合して使用する方法もあると考える。

堀　部会長：

バイオガスで何を発生させることが出来るのか。それを町で活用することが出来るのか。

佐々木農林課長：

可能である。繰り返しになるが、バイオガスで発生したものを町でどのように循環させるのかという事が重要になる。バイオガスの仕組みとしては、処理時のガスでタービンを回して発電する事になる。その発電は立ち止まっているが、発生したガス（水素・液化メタン）をどのように活用するのかが課題となっている。町の公共施設で使用する量としては、微少であることからその仕組み作りが難しい。

堀　部会長：

発電量の少ないコンパクトな施設も可能なのか。

佐々木農林課長：

可能である。先ほど言った個別型がそれに該当する。ある地域の２、３戸の酪農家が作る施設を何百万かを掛けて建設すれば色んな選択肢が出来ると思う。但し、その施設を建設する時に大きな費用となるため、建設の判断を迷う場合に、町とＪＡが支援できないか模索中である。

阿部　副部会長：

仮に２、３戸が集まって建設して、その地域の電気をまかなう事が出来るまたは、処理料が以前より安くなったとしたら、メリットが出てくると思うがそのような考えか。ランニングコストも含めた検討も当然必要になるが。

佐々木農林課長：

その通りである。

次田土地改良係長：

土づくり支援の面から考えても、もしバイオガスプラントが建設され、それも堆肥として供給できるとなれば堆肥センター以外の施設も活用できる方向につながる。

阿部　副部会長、堀　部会長：

酪農家が処理する施設が出来れば、生堆肥を持ってくる手間が省けて、循環するような気がする。町内に何か所かあれば、その周辺をまかなって遠い箇所については今まで通り堆肥センターを使用するという風になればより良いと思う。

次田土地改良係長：

1. 安定的な堆肥供給に向け、バイオガスプラント等家畜糞尿処理施設で集める原料も含めた、将来像、施策の方向として追記していくべきか内部で検討する。

土づくりのために、堆肥を散布すれば間違いなく向上するという事で良いか。

阿部　副部会長、堀　部会長：

散布しない人も中にはいるが、向上すると考えて良い。

金津谷　博一：

マッチングは、堆肥の需要と供給のピーク時期が異なるため、難しい印象がある。それよりは、堆肥センターのようにどこかに堆積するという考え方の方が良いと考える。

堀　部会長：

小麦後に堆肥を散布するのが主となるが、その時期に酪農家は麦稈作業をしているのが障害になる事がある。

阿部　副部会長：

麦稈と堆肥を交換する事が多いが、その交換先が新得町等の町外であることがかなりあるため、非効率であると思う。町内で回すように改善できないだろうか。

古館　明洋：

麦稈は、町内で余っているのか。

阿部　副部会長：

芽室の酪農家の数より、麦稈の方が多い。交換するところがないから、町外に堆肥を求めている人が多くあるのではないかと思う。

古館　明洋：

堆肥センターの堆肥の品質と比べて、町外の堆肥はどうか。

阿部　副部会長：

堆肥センターの方が良い。

古館　明洋：

芽室は酪農家が少ないから生産する量が不足しているという現状か。

阿部　副部会長：

その通り。水分が多い堆肥は、堆肥センターで受け入れてもらえないというのであれば、ある程度水分を落とす努力は酪農家にしてもらい、中熟程度にしたものを麦稈交換で処理するのが良いと思う。（差額が出る場合はお金を出すなども良い）

堀　部会長、阿部　副部会長：

畑作農家は、麦稈をあげるから堆肥をもらうという物々交換となっている。そのようなシステムもＪＡにあれば良いと思う。

次田土地改良係長：

②散布体制の確立に関しては、現実性を持った取組みとして、ＪＡも含めてすり合わせを行いたい。振興計画の中ではあくまでも方向性を定めるにとどめ、具体的な事は個別計画でやっていくという事が良いと思う。

阿部　副部会長：

大枠的には、包括的にマッチングするという方向で、このような考え方で良いと思う。

古館　明洋：

堆肥センターには水分調整用の堆肥のストックはあるのか。

阿部主事：

現状はない。水分量が多い堆肥は、受け入れていない。

古館　明洋：

という事は、現状では酪農家は水分を落とすという作業が必要なため、酪農家は負担になっている。

阿部　副部会長：

実際にマッチングするとなれば、畑作農家がどの程度の堆肥（生、中熟、完熟）なのかを写真で見て判断する必要があると考える。１軒ごとに求められる堆肥の需要が異なるので、聞取りをしないとマッチングしないと思う。

阿部　副部会長：

課題(2)の甜菜に関して、交付金が下がっている。それと、甜菜を作付するために堆肥を散布している訳ではなくなってきている。甜菜を作らなくても、地力を維持すれば良いという事であれば、ビートトップよりもキャベツの残渣の方が地力向上に向いていると思う。

昔は甜菜が地力向上になるという考えであったと思うが、現在は昔と比べて作るものも変わってきており、それが地力になっていない訳でもないため、一概に甜菜ばかりを推奨するのも考え方がどうかと思ってしまう。

それも、甜菜以外にも地力につながるかどうかの指標が無いからであると思う。ＪＡの出している地力になる調査結果は、地力の維持には堆肥のあるなしが８割方関わっていた結果であった。

そのため、甜菜の作付というよりも積極的に堆肥を散布することを重要視する位置づけにして、かつ畑作４品の輪作体系を維持していくという方向の方が良いのではないか。

（その他、質問など無し）

**事務局より検討項目２の「農地・土地改良施設等の整備・充実」説明を終えて**

堀　部会長：

検討項目２について説明が終わりました。御意見、御質問等はありませんか。

堀　部会長：

リールマシンの整備は、順番に回ってくるという事か。

次田土地改良係長：

道営土地改良事業で整備することになるが、地区ごとに順番に実施する。中長期計画を作成し、何年後に地区が回ってくるというものがあれば、それが整備する目安になるため、振興計画に取り込もうと考えている。

堀　部会長：

地域で回しているのか。今はどのような整備をしているのか。

次田土地改良係長：

農村地域を巡回する形で回しており、現状は２周目に入っている。工種は、課題(2)で記載している通り。

堀　部会長：

　ちなみに、坂の上地区はいつ回ってくるのか。

次田土地改良係長：

あくまでも目安であるが、およそ１０年後である。このような中長期計画があれば、経営の目安になればと思っている。次に地区を立ち上げる箇所としては、一周目が終了してから最も経過している美生地区エリアで考えている。

阿部　副部会長：

　土地改良施設とは何か。

次田土地改良係長：

土地改良施設は明渠を位置付けており、農業用水施設は水を撒く施設、暗渠は個人の所有と区別している。気象状況の変化等により、明渠を整備してほしいという声があれば、国や道に要望をしていく。

堀　部会長：

　新たな明渠整備というものも可能なのか。

次田土地改良係長：

可能であるが、今ある明渠で問題ないのかどうかを検証した上で実施する事になる。河北地区においても、国営事業を行う予定があるが、現状の明渠で近年の気象状況を考慮した形では断面が不足しているという事になれば拡幅するという結果になる。気象状況に関しては、１０年に１度の確率雨量に関して検証する等、整備する上での決まりも存在する。

阿部　副部会長：

　老朽化というのは、どういった状況を指すのか。

次田土地改良係長：

明渠でいえば、護岸ブロックの傾倒や損傷等を含めた形を考えている。

阿部　副部会長：

　明渠の再整備というのは、例えば建設当時に流したかった低い土地の方に何らかの事情があって、高い土地の方に流すことになっていた場合も、その区間だけ低い土地の方に変更する等も対応可能なのか。

次田土地改良係長：

再整備となれば、一連で調査するので、深く掘るのが良いのか、移設するのか、拡幅するのか等を検討した上で、整備する事になる。

阿部　副部会長：

　そういった明渠はあると思うので、昔の事情を知っている人に聞いた上で整備するのが１番だと思う。環境保全組合等で聞取りすれば再整備の素案になるので良い。

急に水道が変わる箇所なども知っているので、短い区間であれば整備する箇所が多いと思う。

次田土地改良係長：

参考にさせていただく。

金津谷　博一：

多面的機能支払交付金は、今後もずっと続けていくという方向なのか。

次田土地改良係長：

事業を使わないと、地域協同は出来ないし、また国からの交付金を使用しなければ、町の単独費だけで膨大な土地改良施設等の維持管理していくことは難しいと考えている。

堀　部会長：

　その他に御意見・御質問等はありますか。

　（質問など無し）

次田土地改良係長：

その他の案内として、資料２で農業振興計画の項目を参照していただきたい。振興計画は、計画を策定して終わりではなく、５計画の進行管理をしながら、振興計画を進めていくという位置づけであることをお伝えしておく。

連絡事項として、次回の部会は今回意見をいただいた項目を踏まえ、ＪＡと調整していき、部会を行う時は、部会長と調整し案内させていただく。

　また、振興計画の進捗として検討委員会に報告する必要があり、それを４月に実施する予定であるので、部会長にはご参加いただきたい。

堀　部会長：

　４月の会議以降に、また部会を実施するという事か。

次田土地改良係長：

　そのようになる。振興計画は令和２年度の３月末までに策定する目標としているので、それまでにまた何度か部会を開催させていただく事になる。